

かしはら



かしはら
第181号
令和四年
紀元2682年

- 御挨拶
- 神武東征を題材にした新曲「弘曉雄詰くあかつきの歌」を巡って
- 文華殿と江戸城本丸御殿大広間について
- 主な祭典・行事の御報告
- 榎原だより
- 今後の主な祭典・行事の予定

御挨拶

榎原神宮或いは神武天皇に関係する歌と言えば真つ先に思い起こすのは、高崎正風作の「紀元節」であり、また昭和十五年紀元二千六百年を迎えるにあたり広く国民から公募された国民歌「紀元二千六百年」が代表的なものでありましょう。「雲に聳ゆる 高千穂の」で始まる紀元節は二月十一日斎行の紀元祭で歌われます。御勅使が大幣帛を奉り御祭文を奏上された後、四千余名の参列者全員で高らかに歌われます。

一方、「金鶏輝く日本の」と歌われる奉祝国民歌「紀元二千六百年」は当神宮として祭典・行事等で歌われる機会はいませんが、神武天皇が榎原宮で即位されたのが我が国の始まり・紀元であり、それから二千六百年ということがあります。これを記念して榎原神宮境域拡張整備事業と国家事業に拠る御社殿整備が行われ、現在の御社殿や境域が造られました。紀元二千六百年は榎原神宮と縁の深い出来事であり、このことは現在もなお多くの人々に認識をされております。

因みにもう一つ「紀元二千六百年頌歌」がありますが、こちらはゆつくりとした曲で「遠すめろぎの かしこくも」で始まります。

この榎原神宮境域拡張整備事業には、全国から団体個人延べ百二十万人以上の方々が建国奉仕隊の名称の組織体として、勤労奉仕に従事されました。この建国奉仕隊の歌として山田耕筈作曲の「建国奉仕隊の歌（八咫鳥の旗の下に）」があります。

「あゝ緑濃き榎原に」と歌われて、力強い曲です。

これと同じ時期に作られたのが、北原白秋作詞 信時潔作曲の交声曲（カンタータ）「海道東征」であります。高千穂から始まり神武天皇の御東征のシーンが様々な音で表現されており、壮大な建国の曲であります。

また「弘曉雄詰くあかつきの歌」があります。これは今回の「かしはら」に玉稿を賜りました鈴木英史様が令和三年に作曲されたもので同様に神武東征をテーマにしております。

榎原神宮は一昨年令和二年に御鎮座百三十年を迎えました。この記念の年を迎えるにあたりNPO法人音楽の森 理事長荒井敦子様が奉祝曲「時のはじまり」を作詞作曲して下さいました。（かしはら第一七七号既報）神話の時代から人の時代に移り変わり、神武天皇が榎原宮で即位され日本の国が建てられた。以来時が過ぎても神武天皇を慕う人々の心は変わること無く今に至っている、という歌です。荒井様は昨令和三年には、神武東征の曲を作られました。「美しところへ」というポレロ調の歌です。今までの神武東征のイメージから離れた全く斬新な曲ですので、機会があれば皆様にも是非お聴き頂きたいと思っております。

この様に神武天皇や榎原神宮に関係する歌を書いてみましたが、この中で何曲かはユーチューブを通して聴くことが出来ます。どうぞお聴きになって下さい。

榎原神宮宮司 久保田昌孝

東征される神武天皇





神武東征を題材にした新曲 「弘曉雄詔くあかつきの歌」を巡って

「神武天皇東征を題材にした新しい曲を書きませんか？」

陸上自衛隊中部方面音楽隊柴田昌宣隊長（当時）からの要望で作曲した作品、「弘曉雄詔くあかつきの歌」は二〇二二年二月二四日大阪フェスティヴァルホールにて、鶴真衣さんの独唱、柴田昌宣隊長指揮による中部方面音楽隊（以下中方音）の演奏で初演されました。会場はコロナ禍にも拘らず二〇〇〇人ほどの満席の聴衆、更に久保田宮司様にもご臨席頂くという光栄を賜りました。

この作品の成立までにはお導きでしかあり得ない事の連続でしたので、この場をお借りして、その成立と曲への想いを記していきます。

発端は初演の数年前に遡ります。

中方音での仕事の折、隊長室に案内されます。すると窓際に、神棚のコーナーが燦然と輝いているではありませんか。各地の音楽隊に招かれた経験がありますが、このように立派な神棚を祀っておられる隊長は初めてで、私も仕事場には神棚を祀っておりますので即座に反応しました。

「隊長、やはりお参りは欠かせませんよね」

この一言で一気に話が弾みます。

「英史さんも行かれますか？」

「もちろんです。伊勢神宮は毎年、出雲は仕事柄毎月のように訪れています」

「実は音楽隊はご縁があり、伊勢神宮でも橿原神宮でも演奏の機会があるのですよ」

中方音は伊丹駐屯地内という土地柄も相まって数々の神宮様とのご縁に興奮し、しばらく神宮について会話を交わします。すると隊長が

突然切り出しました。

「信時潔の海道東征をご存知ですか？」

作曲家・信時潔は「海ゆかば」の作曲者で有名ですが、「海道東征」は一九四〇年に皇紀二六〇〇年を祝賀する皇紀二六〇〇年奉祝曲として作られた、合唱、独唱、と管弦楽のための八曲から成るカンタータ。歌詞は北原白秋の書き下ろしに寄るものです。

「先日実演を聴く機会がありまして、涙が出るほど感動してしまつたのです。実はその時、新たに神武天皇を題材にした作品を音楽隊で初演したいと閃いたのですが、英史さん、書いて頂けませんか？」

この言葉に、私は天啓のような電流が走り使命感と共に

「書かせてください」と即答、神棚を通しての会話から、神武天皇様から引き合わせて頂けたのだ、と言う感謝溢れる感情を抑えきれませんでした。

数ヶ月後、私の名古屋出張中に柴田隊長から連絡が入ります。

「明日夜、橿原神宮で演奏をさせていただくのですが」

これは聴きにおいでなさいというお誘いと直感。予定を見ると仕事は夕方に終わり、近鉄特急で駆けつければ間に合うのです。

翌日橿原に向かい、夜の神宮に響き渡る見事な歌声と音楽隊の演奏を聴きながら、橿原で演奏が聴けるタイミングのお導きを確認、演奏後には、特別にお参りとお祓いの上、久保田宮司に拝謁出来、ますます神武天皇についての理解を深める事が出来ました。

さらに数ヶ月後、鹿児島島に出張。折角の機会です、時間を取り宮崎の出世の地から東征のルートを辿ろうと思い立ち、元宮崎県警音楽隊隊長の井手茂貴さんに連絡を取りました。すると、

「実は私は宮崎神宮の真横に住んでいます。しかも本部宮司はお隣さんですよ」

本部宮司さんにも神宮の内部を特別に拝観させて頂くなど、通常ではあり得ないことが続き、この仕事はまさに遣わされたとの確信は決定的なものになりました。

実は今年二〇二二年には、宮崎と広島からの新作依頼があります。まさに東征を辿るかのようなこの流れも大いなるお導きです。

さて、題名の「払暁雄詔」は、ふっぎようゆうこう、と読み、夜明けを告げる雄叫び、を意味します。字面の強さ、オーラに心を奪われてしまうこの四文字は、作詞を担当した平居宏朗さんによって提案されたものです。

神武東征を音楽にすることは、信時潔の仕事がありますから、私は今回どのように描こうかと構想を考えておりました。平居さんの詞（下記参照）を読んだ際、「東征の旅は、現代の私たちが困難に立ち向かいながら前に進む」という我々の精神そのものを表したものだということに気づかされました。

ここから、曲は三つの楽章「払暁」「東征」「雄詔」からなり、夜明けへ旅へ大いなる意志への讃歌、という構成が決まりました。

中方音の歌姫、鶴真衣さんの歌は三曲目に入ります。驚いたことに鶴さんは初演から譜面を全部覚えて暗譜で歌いました。舞台上の真衣さんは、まさに神からの使者として祀りを司るように何かが憑依したかのような説得力で曲を聴衆に届けてくれ、柴田隊長も「演奏中の記憶がない」というほど没入した入魂の演奏。作曲者の私も感動を隠せませんでした。

いつの日か、榎原神宮でも奉納演奏の機会を賜れば、これ以上のご恩返しは有りません。また宮崎神宮の本部宮司も宮崎での演奏を切望しておられます。神武天皇を巡っての出会いとご恩返しの旅はまだまだ続きそうです。本稿をご依頼頂いた榎原神宮久保田宮司様に、甚大なる感謝の想いと共にこの拙稿をお捧げ致します。

「払暁雄詔」あかつきの歌

作詞 平居宏朗

あかつきはら 暁 払う雄叫びよ
 やみよ 闇夜に棲まう醜どもを
 う 撃ちてしまぬもののふの
 たけいのち 猛る命の轟かせ
 ひつぎ 日嗣の御世を打ち立てん
 あまつち 天地にあまねく満てり 皇神の
 おおみこころ 大御心を魂に受け
 やまと 大和の國を慈しむ
 かむやまとい われがこのみこと た 神日本磐余彦尊立ち
 ひむか 継ぎし日向の弥栄を
 ちよ やちよ 千代に八千代に言祝ぎて
 とわ 永遠に伝えん 暁の
 うた 歌よ照らせよ まほろばの國

プロフィール 鈴木英史(すずき・えいじ)

一九六五年東京生まれ。東京藝術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。作曲、ピアノ、指揮、声楽、雅楽、尺八を学ぶ。安宅賞、第二回日本管打・吹奏楽アカデミー賞（作曲部門）、外務省在外公館長表彰などを受章。

東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック開閉会式典にて作品が使用される。

国民体育大会式典音楽（石川、山形、栃木）、国民文化祭創作音楽（鳥取、秋田）、ねりんびつく式典音楽（石川）等を担当。日本スリランカ国交六〇周年記念作品、台湾クリニック課題曲、二〇二二年度全日本吹奏楽コンクール課題曲委嘱、自作自演コンサート（台湾三公演、シンガポール）、作曲編曲ワークシヨップ（台湾・シンガポール・マレーシア・スリランカ）などアジア地域での活動、シカゴミッドウエストクリニックでも新作を含め採り上げられている。日本音楽著作権協会正会員。



文華殿と江戸城本丸御殿大広間について

奈良県文化財保存事務所 山下 秀樹

はじめに

橿原神宮文華殿（国指定名称は旧織田屋形大書院及び玄関）は奈良県天理市柳本町にかつて存在した柳本陣屋の藩邸（柳本屋敷）の一部を移築したものであることは社報かしはら第一八〇号で述べた。移築復原工事が竣工した昭和四十二年に文華殿は重要文化財に指定されているが、本稿ではあらためて文華殿の文化財的価値について江戸城本丸御殿大広間との共通点から考えたいと思う。

柳本屋敷における文華殿の機能について

社報かしはら第一八〇号で文華殿が「大書院」と「玄関」の二棟で構成され、表向御殿の主要な建物であることは既に述べたが、簡単にその内容について確認したいと思う。

・表向御殿は藩主が公式の対面をするためのもので、客人は玄関から入り、大書院にて藩主と対面した。

・大書院の内部は部屋がし字状に配置され、西側の北から上段・中段・下段の三室が連なり、下段の東に二の間、三の間が続く。さらに三の間の北に来訪者の控室とみられる床を

備えた勤の間が続く。

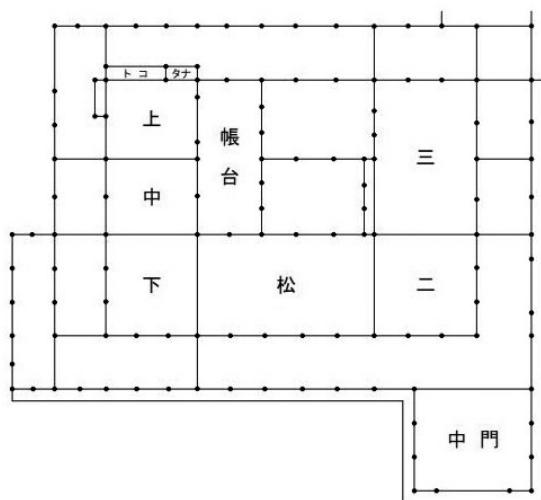
・藩主が客人と対面する際は二通りの対面方法があり、上段を主室として中段・下段に向かって対面する場合と、下段を主室として二の間・三の間の間に向かって対面する場合がある。

現存城郭御殿における文華殿の位置づけ

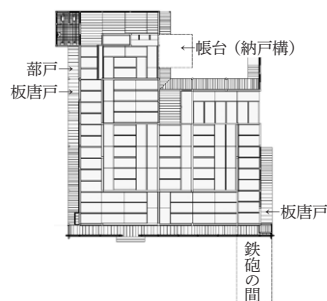
城の象徴といえば天守であるが、現存するものは十二棟ある。一方、城郭御殿で現存するものは川越城、掛川城、二条城、高知城のわずかに四城に過ぎない。そのうち玄関と対面の間である大書院（大広間）の両方が残るのは川越城を除く三城で、さらに本丸御殿に限ると高知城のみである。藩邸が置かれた陣屋をみても玄関と大書院の両方が現地に残るものは、七日市陣屋（群馬県）、伊豆木陣屋（長野県）、柏原陣屋（兵庫県）のみで、移築されたものも文華殿と相国寺塔頭林光院方丈・庫裏（京都府）が知られるのみである。

以上九例の現存御殿建築の造営主体は幕府、国持大名、城持大名、陣屋大名と様々であるが、いずれにしても類例の少ない貴重なものである。

それらのなかでも文華殿（大書院）の平面積（二一八㎡）は城郭御殿に匹敵するもので、二十万石の高知城本丸御殿正殿（一二八



寛永十七年度江戸城本丸御殿大広間平面図



左と同縮尺の文華殿（大書院）平面図

m)を凌ぎ、五万石の掛川城御殿大書院(二二八m)と同規模である。しかも近世城郭史上最大の江戸城本丸御殿の中で最も規模が大きく最高の格式を誇る大広間と平面構成や意匠において多くの共通点も持つ点では他に類をみない。

◎江戸城本丸御殿大広間との共通点

江戸城本丸御殿大広間(以下、江戸城大広間)は七度(慶長十一年、元和八年、寛永十四年、寛永十七年、万治二年、弘化二年、万延元年)も造営が行われているが、万延元年(一八六〇)造営時のものは詳細な図面が残されておりその全容を知ることができる。

平面であれば寛永十四年(一六三七)以降に造営されたものは明らかである。寛永十四年以降の平面を概観すると多少の変化はみられるものの対面のための部屋の平面構成は変わらない。それは文華殿(大書院)と同様に、対面のための主要部分が上段・中段・下段の三室あり、下段から上段に二室が続き、さらに来訪者の控室とみられる一室(寛永十七年度は床を備える)が北に続くという点である。さらに言えば、上段・中段・下段の床の高さを変える点でも一致している。

江戸城大広間、文華殿ともに上段に床、棚、付書院、帳台構えといった座敷飾りを備

えるが、これは他の城郭御殿でもみられる。

他にも共通点があり、南東隅から南に延びる廊下状の付属屋がある。文華殿では失われているが古図の「鉄砲の間」がそれに該当する。こうした突出部は「中門」と呼ばれ、寢殿造の中門廊の名残で、玄関の原形である。

江戸城大広間では中門の北、東面に車寄せと大広間への入口となる板唐戸が建込まれている。文華殿の東面に車寄せが設えてあったかは不明であるが、中門(鉄砲の間)の北の東面は板唐戸で、そこを入った東入側のみ畳廊下となっていたことから高貴な客人の入口であった可能性がある。中門を備える意味については江戸城大広間の図面に以下のような奥書がある。

「右此大広間ノ図ハ古来ノ規矩定法ニ非ズ、古伝ニ鎌倉御所様広間ノ図在リ其内ニ中門車寄実検窓、押板、帳台等ノ名目之アリ、中ゴロ足利公方家ノ時節ヨリ當作広間ハ中門車寄之アリ」

鎌倉將軍家や足利將軍家の邸に倣って中門と車寄せを設けることで武家の伝統を継承したことを示す狙いがあったとみられる。

万延度江戸城大広間の東面の車寄せより北は蓐戸を入れていたが、文華殿も上段付書院付近に蓐戸を入れている。蓐戸も寢殿造以来の伝統的な建具であるが、現存九例の御殿建

築で蓐戸を入れるものは文華殿のみである。

前述の板唐戸や蓐戸の使用もあわせて考えると文華殿と江戸城大広間は主殿風の意匠が採られていると言える。『匠明』(慶長三年「一六〇八」という木割書(建築の設計基準を示したものの)のなかに「主殿」の図があるが、これとほぼ同じ平面をしたものに園城寺光浄院客殿(滋賀県)がある。中門があり、蓐戸、板唐戸が用いられ、付書院、床、棚、帳台構えといった座敷飾りが備わる。

主殿とは本来寢殿を指すもので、のちに寢殿(寢室)と常御所(居間)が一つになってこれを主殿と呼んだ。会所(居間兼応接間)が別棟にあった場合でも出入口は主殿に付加された中門が使用され、客はそこで迎えられる。

江戸城大広間と文華殿(大書院)は東に立派な玄関を備えるが、それでも寢殿造以来の伝統がある中門を付加し、主殿風の意匠を採用したことは徳川家が源姓、織田家が平姓を名乗り、どちらも平安以来の名門であることを御殿の意匠で示したものとみられる。

他に、文華殿(大書院)の屋根南面中央には千鳥破風が一つ飾られているが、万延度江戸城大広間の屋根南面にも千鳥破風が二つ飾られており、庭を挟んで南に能舞台がある点も共通している。

さいしん

文華殿（大書院）は中門こそ失われたものの寝殿造以来の伝統を受け継いだ御殿建築であり、同様の江戸城大広間が失われた現在、それを偲ぶことができる唯一の建物といえる。

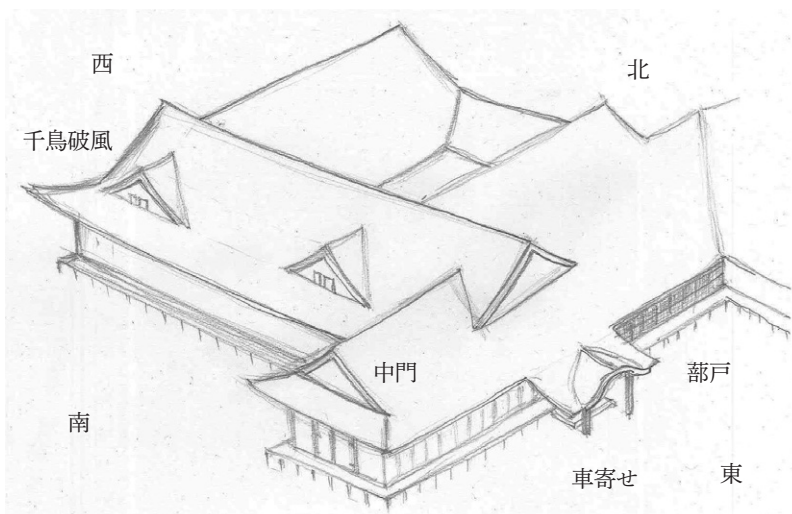
文華殿の修理工事は、これから最も重要な基礎工事に着手する。今年度は文華殿全体を一メートル揚屋し、コンクリート基礎を打設するところまで行う。また、耐震性能向上のための補強方法についても決定する。令和五年度はコンクリート基礎上に礎石を据直した後、文華殿を屋下ろしする予定である。竣工は令和八年三月を予定している。

プロフィール 山下秀樹（やました ひでき）

奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所橿原神宮出張所、出張所主任
平成八年奈良県庁入庁。平成一一年に文化財保存課・文化財保存事務所に異動し、以後文化財建造物の保存修理に携わる。令和二年十一月に橿原神宮出張所に着任。



国宝 園城寺光浄院客殿
（左が中門、車寄せに軒唐破風屋根を付け部戸と板唐戸を建込む）



万延度江戸城本丸御殿大広間 復原図

 主な祭典・行事の御報告

一月

- ・一日 初太鼓
- ・一日 歳旦祭並延寿祭
- ・一日～七日 新春初神楽祈禱
- ・二日 長山稻荷社歳旦祭
- ・三日 元始祭
- ・七日 昭和天皇祭遙拝
- ・十一日 中之月次祭
- ・十五日 古神札御焚上奉告祭
- ・二十日 神武講社新穀奉獻感謝祭
- ・二十一日 後之月次祭

二月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社神符遷霊祭
- ・十一日 紀元祭（勅使参向）
- ・十七日 祈年祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十三日 天長祭

三月

- ・一日 始之月次祭
- ・六日 長山稻荷社初午祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・二十一日 春季皇霊祭遙拝
- ・二十一日 後之月次祭

四月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 御鎮座記念祭 翁舞奉納
- ・二日～三日 奉祝行事『春の出会い神武さん』



令和4年4月2日 御鎮座記念祭



令和4年3月6日 長山稻荷社初午祭



令和4年1月1日 初太鼓

- ・三日 神武天皇祭
- ・三日 国栖奏奉納
- ・九日 花の下連歌 連歌奉納
- ・十日 第十三期甲種飛行予科練習生
- ・戦没者慰霊祭
- ・中之月次祭
- ・二十日 下種奉告祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十二日～

- ・『春の特別参拝と重要文化財 織田家柳本陣屋御殿「文華殿」 特別公開』開催
- ・昭和祭
- ・二十九日

五月

- ・一日 始之月次祭
- ・三日 春季献華祭
- ・五日 有楽流献茶祭
- ・～八日 『春の特別参拝と重要文化財 織田家柳本陣屋御殿「文華殿」 特別公開』開催
- ・中之月次祭
- ・十一日 後之月次祭
- ・二十一日

六月

- ・一日 始之月次祭
- ・九日 皇后献上佐草祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・十五日 御田植奉告祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・三十日 煤払神事
- ・三十日 夏越大祓

※五月より世界情勢を鑑み世界平和祈願のため、月三回斎行される月次祭の内一回『浦安の舞』を奉奏



令和4年6月15日 御田植奉告祭



令和4年5月5日 有楽流献茶祭



令和4年5月3日 春季献華祭

● 新年の様子について

令和四年の正月は新型コロナウイルス感染症が小康状態となりつつあったため、多くの参拝者で境内は賑わいました。

当神宮では毎年一月一日午前零時より「初太鼓」を執り行います。初太鼓では、神武天皇が即位された年を元年とする「紀元」に拠る数、太鼓を打ち鳴らします。本年は紀元二六八二年にあたることから、宮司以下神職が神楽殿の大太鼓を二六八と二回打ち、新しい年の訪れを告げました。

続いて、午前六時より歳旦祭並延寿祭を斎行致しました。歳旦祭では、皇室の弥栄と国の隆昌、五穀豊穡を祈念申し上げました。また、延寿祭では御祭神の御神徳に因み、崇敬者及び参拝者各位の健康延寿を祈念致しました。祭典斎了後には紀元年数に基づき二、六八二膳の「延寿箸」を御参拝の皆様へ授与致しました。

本年の正月三が日は天候にも恵まれ、百万人を越える多くの方々が参拝に来られました。昨年に続き、境内一方通行にしましたが、事前の告知と参拝者の御理解により、滞りなく正月期間を終えることが出来ました。



参拝者に延寿箸を授与

● 春季大祭に併せ、奉祝行事を開催

四月二日・三日の両日に亘り春季大祭を斎行し、併せて奉祝行事を開催しました。春季大祭は地元の方から「神武さん」と呼ばれ親しまれており、例年四月二日に「御鎮座記念祭」・翌三日に「神武天皇祭」を斎行しております。

また、本年は春季大祭に併せ「春の出会い 神武さん」と題して奉祝行事を開催しました。奈良県下では祝日法以前に祭日であった四月三日の神武天皇祭を祝う「神武レンゾ」の風習が今でも伝わっています。当神宮ではこの風習に基づき、境内各所で奉祝行事を企画しました。

奉祝行事では「よもぎ餅」のふるまい、和太鼓演奏や奉納演武、地元自治会による緑日などを実施しました。

このほか、小学生以下を対象とした「職業体験イベント」開催しました。同イベントでは子供たちに「神職・巫女」「警察官」「電車の車掌」体験してもらいました。神職・巫女体験に参加した子供たちは装束に身を包み、正しい拝礼作法を学んでいました。同時開催として防災フェア（奈良県防衛協会主催）も開催され、境内は多くの参拝者で賑わいを見せました。奉祝行事は来年以降も継続して開催して参ります。



職場体験の様子

● 花の下連歌奉納について

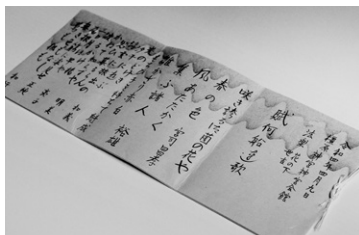
四月九日に「花の下連歌奉納」が執り行われ、参加者が集い宮司の発句より連歌を創作し、内拝殿での正式参拝後、創作した連歌を詠みあげて御奉納戴きました。

連歌とは、和歌の「五・七・五・七・七」の上の句「五・七・五」と下の句「七・七」を交互に読み続け、前に詠まれた句から連想して次の句を詠み上げる詞歌の一種類です。

「花の下連歌奉納」は、京都連歌の会宗匠・南禅寺連歌会宗匠の鶴崎裕雄氏が主催する連歌会が、桜の咲く時期に連歌を詠み神仏に奉納するもので、今回で三回目の開催となります。また、四月九日に御神前で詠み上げられた連歌は、懐紙に清書され五月下旬に奉納されました。



令和4年4月9日、連歌奉納に対し挨拶をする宮司



清書され、奉納された連歌

【第十三期 海軍甲種飛行予科練習生 戦没者慰霊祭】を斎行

四月十日、若桜友苑にて「第十三期 海軍甲種飛行予科練習生 戦没者慰霊祭」を厳粛裡に斎行致しました。

慰霊祭では、斎主の祝詞奏上の後、巫女による神楽「浦安の舞」が奉奏されました。

「浦安の舞」は昭和十五年の紀元二千六百年を奉祝するため、昭和天皇の御製に作曲作舞した神楽舞です。

【御製】

天地(あめつらの)の神にぞ祈る朝な夕

海のごとくに波たためせと

波が立たないような穏やかな平和を神様に祈るといふ昭和天皇の大御心が込められた「浦安の舞」は、全国の神社でも奉奏されています。

先の大戦において、先人達は祖国の日常、歴史、文化そして愛する人々を、命をかけて守って下さいました。今日の平和を享受する私たちは、このことに深く感謝しなければなりません。

当神宮では今後も、尊い生命をかけて祖国を守るため殉じられた英霊に哀悼の誠を捧げ続けるとともに、昨今の争いが一日も早く終息し、世界が平和になりますことを祈念致します。



殉国之碑の前にて「浦安の舞」を奉奏

文華殿特別公開

四月二十二日から五月八日までの十七日間に亘り『春の特別参拝と重要文化財 織田家柳本陣屋御殿「文華殿」特別公開』を開催し、期間中に約千名の方がお越しになりました。

今回、内拝殿への特別参拝を御案内申し上げると共に、令和二年から令和八年にかけて保存修理工事が行われている「文華殿」の建築的・文化的価値を知って頂くため、工事の様子を御覧戴きました。

内拝殿での特別参拝から、「文華殿」の保存修理の見学までの約一時間の行程においては、由緒などの説明と共に、神職と参加者の皆様とが直接語り合う機会もあり、当神宮により親しみを持つて頂いたのではないかと感じております。

特に「文華殿」は天理市柳本町にあった昭和三十年代まで小学校として用いられたこともあり、卒業生など思い入れを持たれている方々も多く訪れ、工事の様子に感心されると共に当時の様子を懐かしく思い出されています。

今後も令和八年の完成まで保存修理の過程や特別公開の開催予定などについて公式WEBサイト・各種SNSにて情報発信して参ります。



大書院を見学する参加者

大祓の御報告

六月三十日に斎館前庭において「夏越大祓」を執り行いました。大祓は国の内外における様々な災いや困難が鎮まるようお願い、知らず知らずのうちに身についた罪穢れを祓うことで心身とも清浄に立ち返ることを目的として古来より伝わってきた神事です。一年を二期に分け、六月と十二月の晦日に宮中をはじめ全国の神社にて行われており、六月三十日に行われる大祓は「夏越大祓」と呼ばれています。

当神宮での大祓は新型コロナウイルス感染症が蔓延して以降、宮司以下職員のみで執り行ってきましたが、今年の夏越大祓は感染対策を実施することで三年ぶりに参列者をお招きすることが出来ました。また、今年の六月は記録的な猛暑日が続いていたため、熱中症対策として斎行場所を斎館前庭とし、参列者は木陰にお集まり戴きました。新型コロナウイルス感染症は終息していないため、神職以下職員のみが大祓詞を奏上し、参列者各位は大祓詞を心中祈念して戴くことで半年間の平穏無事を祈念致しました。

なお、全国崇敬者各位からお送り頂いた形代は大祓後、神職により焼納致しましたこと御報告申し上げます。



形代が入った唐櫃を担ぎ、焼納に向かう神職

「皇后献上佐韋祭」を斎行

きさいのみやけんじようゆりさい
六月九日午前十時より、「皇后献上佐韋祭」を斎行致しました。

御祭神として神武天皇と共に祀られている媛蹈鞬五十鈴媛皇后は、常に神武天皇に寄り添われ、共に国の発展と人々の幸せに御心を尽くされました。

当神宮では昨年より皇后の御神徳を尊び、御功績を偲ぶための祭典を計画しておりました。古事記によると、立后前の媛蹈鞬五十鈴媛命（伊須氣余理比売）のお住まいは三輪山の麓、狹井河のほとりであり、周囲にはササユリが美しく咲き誇っていたと記されています。この記述に基づき、祭典にて皇后に縁の深いササユリをお供えするため、昨春秋より本殿近くにてササユリを育てておりました。

一般に栽培が行われていない種のため入手が困難であるなか、五月末に篤志家より五十本奉納頂けるとの連絡を頂戴し、同時期に当神宮にて育てていたササユリも開花の兆しがあつたため、六月初旬の祭典斎行と相成りました。

祭典当日は奉納されたササユリと境内にて巫女が摘み取ったササユリを併せて御神前に供え、斎主の祝詞奏上に続き、巫女による神楽「榊舞」を奉奏致しました。

来年以降も皇后様の御功績を偲ぶ祭典として斎行を予定しております。



祭典奉仕前にササユリを採取する巫女



神前にササユリを供える神職

今後の主な祭典・行事の予定

十月

・三日 秋季大祭

・三日 秋季献華祭

・十七日 神嘗奉祝祭並神嘗祭遙拝

・中旬 抜穂祭

・中旬 裏千家奉仕献茶祭

・二十五日 軍艦瑞鶴慰霊祭

十一月

・三日 明治祭併石州流献茶祭

・二十三日 新嘗祭

・二十九日 大絵馬掛け替え

・三十日 大絵馬奉納奉告清祓

十二月

・二十三日 神御衣御料奉納奉告祭

・二十八日 煤払神事

・三十一日 神符清祓

・三十一日 歳末大祓

・三十一日 除夜祭

・一日 初太鼓

・一日 歳旦祭並延寿祭

・一日 新春初神楽祈禱

・一日～七日 長山稻荷社歳旦祭

・二日 元始祭

・三日 席上揮毫書き初め大会

・五日 (奈良地区大会)

・六日 席上揮毫書きぞめ大会

・七日 (大阪地区大会)

・七日 昭和天皇祭遙拝

・中旬 古神札御焚上奉告祭

・二十日 神武講社新穀奉献感謝祭

※右記予定以外の毎月一日・十一日・二十一日は月次祭を斎行。



書き初め大会は3年振りに開催を予定しております。



新嘗祭にて本年の豊穰に感謝致します。



「瑞鶴之碑」の前にて英霊の御霊を慰め、平和を祈念します。

ようこそ、日本のはじまりへ。
橿原神宮

〒634-8550 奈良県橿原市久米町934
TEL/0744-22-3271 FAX/0744-24-7720



橿原神宮

検索

発行日／令和4年8月
編集・発行／橿原神宮庁
印刷／岡村印刷工業株式会社